

牛久：学校周辺に見る自然

第26号 ひたち野うしく小(、ひたち野うしく中)

2020年5月31日発行

＜ 晩春の校庭の植物 ～⑦草本(離弁花類)その3.その他 ＞

こんにちは。開校11年目のひたち野うしく小校庭、4月末～5月の植物。今回は、前々号カタバミ科、前号マメ科以外の離弁花類の草のを紹介しします。



セイヨウカラシナ(上左)と、その蜜を吸うハチ(上中)。ナズナ(上右)とミチタネツケバナ(下)。

まずは、アブラナ科のなかま。アブラナに似ていますが、セイヨウカラシナです。よほどおいしいのか、近づいても蜜を吸うハチはすぐには逃げません。おなじみのナズナやミチタネツケバナもありましたよ。ナズナはまだ花も咲いていましたが、ミチタネツケバナはすべて実になっていました。



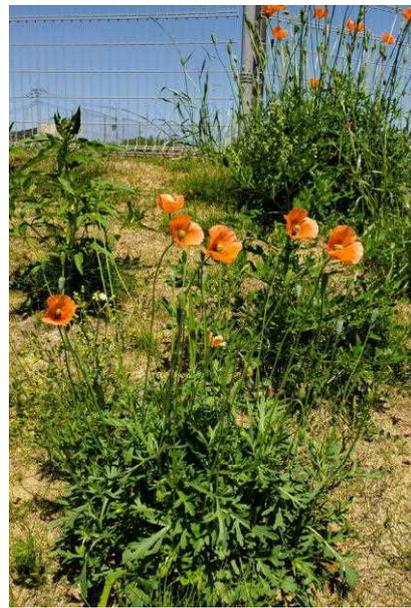
続いて、アカバナ科のコマツヨイグサとユウゲシヨウ。コマツヨイグサは校庭や道ばたでも見られますが、故郷の砂浜でふつうに見ていたのので、以前は海岸の植物だと思いこんでいました。この花を見ると、故郷を思い出します。ユウゲシヨウは南アメリカ原産の帰化植物で、熟した実が雨にぬれると開き種子を飛ばすそうです。

コマツヨイグサ(左)と、ユウゲシヨウ(右)。



ノミノツツリ(左)と花のアップ(中)。花期を過ぎたオランダミミナグサ(右)

ハコベのなかま(ナデシコ科)で、オランダミミナグサはもう花の時期を過ぎていましたが、かわってノミノツツリが花盛りでした。花のアップを見ると、ハコベのなかまが花弁5枚の離弁花をもつことがはっきりと分かりますね。オランダミミナグサは、その名の通り、ヨーロッパ原産の帰化植物です。



大きく伸びてきたギシギシ(左)と、花盛りのナガミヒナゲシ(中、右)。

こないだまで地べたに葉を広げていたギシギシ(タデ科)は、大きく伸びてきて花穂も出していました

た。地中海沿岸原産の帰化植物、ナガミヒナゲシ(ケシ科)は花盛りで、名前の由来となる「長い実」もできはじめていました。一つの実の中に千個ほどの細かい種子が入っていて、風で運ばれます。



北米原産のアメリカフウロ(左)と、花のアップ(右)。

最後に、アメリカフウロ。北米原産の帰化植物で、日本のゲンノショウコに少し似ていますが、同じフウロソウ科です。花弁5枚の、離弁花ですね。

【理科支援員：宮内】